

| | |
|---------------|---|
| 氏 名 | 西牧 和也 |
| 学 位 の 種 類 | 博 士 (言語学) |
| 学 位 記 番 号 | 博 乙 第 2781 号 |
| 学 位 授 与 年 月 日 | 平成 28 年 3 月 25 日 |
| 学 位 授 与 の 要 件 | 学位規則第 4 条第 2 項該当 |
| 審 査 研 究 科 | 人文社会科学研究科 |
| 学 位 論 文 題 目 | A Study on Cross-Linguistic Variations in Realization Patterns: New Proposals Based on Competition Theory (具現パタンの言語間相違に関する研究：競合理論に 基づく新提案) |

| | | | |
|-----|----------|----------|---------|
| 主 査 | 筑波大学 教 授 | 文学博士 | 廣 瀬 幸 生 |
| 副 査 | 筑波大学 教 授 | 博士 (言語学) | 加 賀 信 広 |
| 副 査 | 筑波大学 准教授 | 博士 (言語学) | 島 田 雅 晴 |
| 副 査 | 筑波大学 准教授 | 博士 (言語学) | 和 田 尚 明 |
| 副 査 | 東北大学 准教授 | 博士 (文学) | 長 野 明 子 |

論 文 の 要 旨

本論文は、生成言語学が問題とする言語の普遍性と多様性のうち、多様性に関してその説明原理を求めようとするものである。本論文が採用している枠組みは Ackema and Neeleman (2004)で提案された「競合理論 (Competition Theory)」と呼ばれるものである。主に英語と日本語というタイプの異なる 2 つの言語を対象に競合理論を最大限に適用することを試み、さまざまな日英語間の相違が実は競合理論という一つの理論体系から導かれることを示している。

Ackema and Neeleman (2004)によれば、抽象的な形態統語構造が音韻具現する際、「句」という「統語論的な単位」として具現するか、「語」という「形態論的な単位」として具現するかで競合が起こり、言語によりどちらの具現形式が優先されるかが決まっているという。言語は「統語具現」を優先する「統語具現優先言語」と「形態具現」を優先する「形態具現優先言語」に二分されるのである。例えば、動詞とその目的語が併合してできた形態統語構造が常に動詞句として具現する英語は「統語具現優先言語」である。動詞 *drive* と名詞 *truck* からは必ず *drive a truck* という動詞句が派生され、*truck-drive* という N-V 複合語は派生されない。一方、動詞複合語を認める日本語は、「形態具現優先言語」といえる。何らかの理由で統語具現と形態具現が競合しえない場合は、残った一方の具現形が無条件に選ばれる。例えば、たとえ「統語具現優先言語」であっても統語具現が許されない環境では形態具現を妨げる

わけではない。これが「優先」の意味するところである。Ackema and Neeleman (2004)では動詞と目的語のような述語とその項が併合した形態統語構造の具現について扱っているが、本論文では修飾・被修飾構造、等位構造などにもその適用範囲を広げ、競合理論の可能性を追求している。

本論文は5章からなり、Appendix を巻末に含む。第1章は序論で、本論文の目的と構成が述べられている。目的の部分では、言語間比較といってもいわゆる類型論 (typology) とは異なり、「パラメータ」という概念に基づく生成言語学の観点からのものであることが明確に述べられている。

第2章は競合理論の導入である。統語具現優先、形態具現優先などの基本概念の説明に加えて、競合理論の理論的背景も述べられている。極小理論や分散形態論と同じく Beard (1995)の分離仮説 (Separation Hypothesis) に沿っていること、つまり、意味と音韻具現形式が1対1対応になっているわけではなく、それらの関係は独立していると考えられる理論であることが明記されている。また、「優先」という考え方に見て取れるように、最適性理論と関連があることも明確に述べられている。

第3章は本論文の中心をなす部分であり、Ackema and Neeleman (2004)では見られなかった修飾・被修飾構造の具現に競合理論を応用する試みが展開されている。特に、形容詞が名詞を直接修飾 (direct modification) する名詞修飾構造の具現形に関して、日英語の違いを論じている。具体的には、統語具現優先言語の英語では名詞句 (例: an old family)、形態具現優先言語の日本語では複合語 (例:「旧家」) として具現するとし、修飾・被修飾構造においても競合理論が有効に機能することを論証している。さらに、日本語には wooden のような関係形容詞に相当する形容詞が存在せず、英語の a wooden desk に相当する表現は、「木の机」、というように複合語ではなく句になるということにも着目し、これを「優先」という概念で説明している。そして、競合理論を支持する事例であると論じている。

第4章は、競合理論の適用範囲をさらに広げて日英語比較を行い、それにより競合理論の妥当性を示している。まず、英語の結果構文と日本語の V-V 複合語をとりあげ、それらが統語具現と形態具現で対立するペアとして捉えられることを指摘している。つまり、英語では結果を表現する場合、結果構文 (例: Hanako pounded the metal flat.) として統語的に表現するが、日本語では V-V 複合語 (例:「花子は金属を叩きのばした」) として表現し、これはまさしく競合理論が予測するものであると論じている。同様に、等位構造も英語では等位接続詞 (and など) を用いて統語的に表現する (例: parents and children) が、日本語では等位複合語という語の形式を用いる (例:「親子」) としている。また、談話標識についても、統語具現と形態具現という観点で両言語の形式の違いが説明できると論じている。例えば、英語の発話行為マーカーの I tell you に相当する日本語表現は拘束形の終助詞「よ」とであるとされるが、このことは、英語では挿入句として、日本語では語を構成する拘束形態素として具現すると考えることで説明している。さらには、編入 (incorporation) と合成 (conflation) の対立も競合理論で捉えられるとしている。英語の動詞 shelve は Hale and Keyser (1993)の仮定する構造をとるものとするれば、この音韻具現は合成によるものであるが、日本語にはこのような操作はない。合成は音韻具現形に形態統語構造の跡を残さないという意味で統語具現形式、編入はそれを残すという意味で形態具現形式と考えて、これも競合理論の中におさまるという見方を提示している。

第5章は本論文全体のまとめと総括である。

Appendix は、競合理論が英語に N・N 複合語がないことを予測する問題を扱っている。英語で一見複合語に見えるものは語彙化という、複合とは別の操作が句に適用した結果、生起したものであるという可能性を示唆している。

審 査 の 要 旨

音と意味の分離仮説をとり、形態統語構造の音韻具現にこそ言語の多様性をもたらす要因があるとする生成言語学においては、その仕組みを研究することには大きな学問的意義がある。しかし、現状ではその詳細は十分にわかっていないといわざるを得ない。本論文はまさしくこの問題に真正面から果敢に取り組んだものであり、この点で学問的意義が極めて大きいとまず評価することができる。

特筆すべき点は、Ackema and Neeleman (2004)の競合理論に基づき言語の多様性の問題に取り組んだところである。競合理論では言語を統語具現優先言語と形態具現優先言語の二つに分けるのだが、本論文では、前者の代表として英語を、後者の代表として日本語をとりあげ、タイプの異なる両言語を詳細に比較している点はAckema and Neeleman (2004)の研究には見られない独自の点である。そして、競合理論を最大限に適用し、かつ発展させ、言語の多様性の問題をこの枠組みの中でこれほど緻密に扱った研究はおそらくこれまでにない。本論文は、競合理論の可能性を徹底的に追求した国内外で初めての研究であり、競合理論による研究を推進していくための重要な先行研究として今後位置付けられるものと思われる。この意味でも本論文の学問的価値は極めて高いといえる。

また、本論文は、様々な現象をとりあげて日英語比較を行っている点でも高く評価できる。まず、Ackema and Neeleman が扱っていた項・述語構造だけでなく、名詞修飾構造、等位構造にも平行的な相違が日英語に見られることを示し、競合理論の妥当性を説得力ある形で示している。さらに、競合理論という枠を設定することで見えやすくなった日英語の相違を第4章で数多く取り上げている。例えば、英語では単一の動詞 (make など) に「～てあげる」の意味が含まれる (例: Taro made Hanako a doll.) が、日本語では動詞に明示的に「～てあげる」が付加すること (例: 「太郎が花子に人形を作ってあげた」) をあげて、英語は合成タイプの言語であるが、日本語はそうではないことを観察している。そして、両言語にこのような相違があっても、競合理論では自然に説明がつくことを示唆している。さらに、談話標識にまで考察の対象を広げ、I tell you という表現と終助詞「よ」の対応関係も自然な形で導き出せるとしている。このように、競合理論のもとで考えれば何ら不思議なことではないと言える形で、様々な現象やデータについて新たな見方を提示している点に大きな功績が認められる。

ただし、基本的な現象や概念に関して、まだ不明な点も残っている。例えば、形態具現優先言語の日本語にも文という単位は存在し、その中で動詞句という単位は存在する。本論文の仮定をとれば、この場合は競合する形態具現形がないということになるが、その説明が求められる。また、英語の N-N 複合語とされているものをどう扱うかについて、Appendix で語彙化の可能性が述べられているが、その適用が無制限であり、明確な答えが出されているとは言い難い。もちろんこのような問題は、今後の課題として取り組むことができるので、本論文の価値を何ら損なうものではない。

平成 28 年 1 月 22 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条 (1) に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士 (言語学) の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。